第 1 章

近代の始めにいたるまでの
キリスト教ディアコニー事業

今日にいたるまでその叙述の全体を超えたものがいない、すばらしいゲルハルト・ウールホルンの著作は、全時代にわたるキリスト教の愛の活動に関するもので、「私たちの主は、弟子たちに与えた愛の掟を新しい掟と名づけている。（ヨハネ 13:34）キリスト以前の世界は愛のない世界である、ということであった」という衝撃的一句で始まっている。[1]

私たちは、初期のキリスト教が入る前は愛のない世界であったという、この文章をそのまま繰り返すことは絶対にできない。古代世界についての私たちの認識は以前より豊かになっている。それはそんなに暗いものではなかったのである。

キリスト教発祥の地、古代オリエントは、きわだった慈善活動を昔から知っていて、それをうまく組織するすべを心得、慈善をよびかける訴えをいつも惜しまなかった。例えば、古代エジプトの知恵の書は黄泉（よみ）の国における審きのことを考えて飢えている人にスープを与え、渇いている人に飲ませ、裸の人に着せ、外国人に宿を貸し、囚われた人を解放し、病人を看病し、死者を葬るチャンスを逃すことがないように忠告している。墓碑銘（ぼひめい）は、古代エジプトが、「この世で行う７つの慈善の働き」を、いかに真剣に受け取っているかをあらわしている。オリエント全体は金持ちと貧しい人との正しい関係について多くのことをよく考えていた。[2]

神を恐れる後期ユダヤ教の敬虔なイスラエルはよく似た慈善事業を知っており、訓練していた。また愛の奉仕を使命とする信徒会があった。[3]　初期のキリスト教は、慈善について知っておりそれを実行していた世界のなかに、足を踏みいれた。

A．古代のキリスト教ディアコニー

1

古代教会のディアコニー奉仕
使徒時代と使徒後の時代

キリストは、マタイによる福音書25章35-39節の力強い言葉をもって、弟子たちを、実際にオリエントではよく知られ行われていた愛の奉仕の中に置いた。[4] だが彼は、その時、弟子たちを、将来、法廷で釈明し証言しなければならない世界審判者である自分に結びつけている。彼らは貧民、貧窮者、孤独な人を助け世話をして「イエス・キリストの愛の後継者」となる。彼らはゆるされた者として、また救われた者として父なる神の家に住めるということを知らされていた。「私たちは自分が死から命へと移ったことを知っています。兄弟を愛しているからです。」(1ヨハネ3:14)

愛する意志は全く自発的に激烈に弟子たちからあふれ出る。初代キリスト教においては家族から家族へ、兄弟のように助け合った。だが、教会共同体全体が責任を覚えていた慈善活動も初めからあった。教会共同体が最も貧しい人たちの世話を委ねたディアコニー職は、エルサレム原始教会にはなかった。言葉で宣教することと愛の業は、使徒言行録第6章でディアコーンと言っている7人のように、使徒たちと共にしていた。純粋な福祉職はまず2世紀に、初期カトリック教会の中で発展した。最初はすべての働きは即席でなされた。[5]

キリスト教を受け入れたギリシア・ローマ世界の中で共同体が成長すると共に、愛の奉仕は増大した。私たちはコリントにおける貧しい人たちのための食事を知っている。(1コリント11:17以下)　使徒パウロは、貧しくなったエルサレム教会のために彼の教会で募金を集めた。使徒時代と使徒後の時代に客をもてなすことと寡婦(かふ)への扶助は上位に

おかれていた。人は定期的に支援するリストのもとに貧しい人を並べ、教会のディアコニー奉仕の中に組み込んだ。彼らは悲しむ人を励まし、病人を看病し、孤児も引き受けなければならなかった。

「ディアコニッセ」[女奉仕者]という名前は定着した。本来の、また公認の職務はこのことを意味していなかった。「ディアコニッセ」たちは、教会が多くの仕方で自由におこなう援助をあらわしていた。この女性のディアコニーは、後には後退した。[6]

そこで、1世紀の初期の教会は、全く自明の事として慈善活動を行なっていた。初代のキリスト者たちはユダヤ教出身であって、そのかぎり、彼らはユダヤ人として準備していたこと、施し物に用い、慈善に使う貧民援助を、さらに進めた。最下層の人たちが多数を占めていたキリスト教共同体のなかで、その機会が少なかったのではない。組織された愛の活動は早い時期に行われていた。ただ一つ気がかりな問題は、困窮している兄弟たちを助けるこれらの奉仕が、自分自身の救いに対する感謝の行為であるのか、ユダヤ教できめられた善き業なのかどうかという問題である。[7]

2

2世紀と3世紀の初期カトリック教会

第2世紀に、天秤の皿はあきらかに第2の方向へと向かった。施しは称賛すべき働きとなった。2世紀と3世紀は、初期カトリック教会が監督職と規則と明確に表明された信仰告白をもった期間であり、ディアコニー事業はすばらしく発展した。それはとても厳しい迫害と、内外の危険の中でなされ、キリスト教は問題の中に存在したのであり、ディアコニーは求められた新しい責任を果たすようになった。囚われたキリスト教徒は訪問を受けた。捕えられ、鉛鉱山で厳しい鉱山労働をするように有罪判決を受け、追放されたキリスト教徒は、訪問を受けた。また投獄された人を解放しようとし、追われている人をかくまった。この愛は創意に満ちていた。[8]

ディアコニーの任務は、とりわけ３世紀に10年ごとに貧窮化した政治の世界を考えると、より苦労の多いものとなった。キリスト教共同体自身にも同じような結果をもたらす大困窮が生じた。その時、教会共同体は休みなく成長した。加えて、寡婦と孤児に対して準備した援助の奉仕をなし、病人、囚人、貧民、また埋葬されない死者に仕えるディアコニーの責任が生じた。働く力のある人には仕事が紹介され、働く力のない人にはバランスのとれた援助のシステムによって世話がなされた。

当初は、使徒と長老がいて、ことばの宣教と慈善活動は、教会共同体の中で彼らの手で一つにまとめられていた、その後すべては教会監督の手の中におかれた。１世紀の簡素な教会共同体は聖職者と信徒とを切り離して、司祭の教会になった。ディアコーンたちは欠かせない援助者として、すべての福祉業務で監督の側についた。いまやすべての慈善事業は、特別な機関として、教会のディアコーン職の中に集約された。監督とディアコニーの関係は、しばしば父と子のように親密な形をとった。[9] ディアコーンたちは、並はずれた業績によって、教会の敵対者のなかですら高い評価を獲得した。彼らはその職務の中で、多彩な任務を統合した。貧民援助、財産管理、礼拝奉仕と助言、洗礼志願者教育などが、ディアコーンに委ねられた。[10]

オリエントにおいてのみ、正式な「ディアコニッセ」職が形成された。そこで聖職者とみなすようになった。[11] 彼女たちは、女性患者を看病し、礼拝奉仕をする女性を監督し、女性の洗礼式の時になくてならない存在となった。そこで、３度完全に沈める洗礼が行われた。

この嵐の２つの世紀の中で教会は感嘆に値することをなすようになった。次第に困窮がひろがり、経済的な悲惨が絶え間なく増大した世界の中で、あらゆる攻撃や迫害にもかかわらず、仲間うちの貧民の世話をしただけではない。災害時には、このことは特に明らかになった。記憶すべきことは、アレキサンドリアの監督ディオニシウス(265頃)のアレキサンドリア(エジプト)におけるペストの報告に残っている。ペストは３世紀半ばにエチオピアで発生し、エジプトと北アフリカに蔓延した。手におえないパニックの中ですべての人は逃げ、ペス

トの患者をあとに残した。抑制していたものはすべて失われた。不安と渇望が同時に人を襲った。一方、家の中には死体が積み上げられ、人が死に絶えていなくなった場所をこじ開けて略奪が行われた。この恐怖の時代の中から、ディオニシウスは次のように報告している。

「私たちの大多数の兄弟たちは、大いなる隣人愛と兄弟愛から自分を捨てて団結し、(感染を)心配せずに病人を見舞い、すぐれた奉仕を彼らになし、キリストにあって彼らを看病し、喜んでその人たちとこの世に別れを告げ、他者の苦しみによって自分を満たし、隣人の病を自分に向け、その痛みを進んで引き受けた。多くの人が死んだその後、彼らは病の中でほかの人たちを看病して、激励し、その人の死を自分に引き受けた。

長老、ディアコーンたち、称賛すべき信徒たち、われわれの兄弟たちのよい人たちは、こうしてこの世に別れを告げた。偉大な敬虔と変わらない信仰から受けたこの死に方も、殉教者になんら劣っていない。

彼らは、聖人(すなわちキリスト教徒)の死体を心配せずに手に受け、膝に抱き上げ、その目を閉じ、口を締め、彼らを肩に担いで、正しい場所に置いた。また彼らをしっかりと抱いて、風呂に入れ、きれいな着物を着せた。生存者たちもやがてはこの死者に従って、おなじ運命をたどるのであった。

しかし、異教徒たち[die Heiden]はまったく反対のことを行った。彼らは病気になると、その人と縁を切った。彼らは最も愛していた人から逃げ、死にかかっている人を、路上に放置した。彼らは死者を埋葬しないで放置してはばからなかった。彼らがどんなに努力しても、それを回避することは容易でなかったにもかかわらず、彼らは伝染病と死者の社会から逃げた。」[12]

同じ時に、カルタゴの大監督ツィプリアン(キプリアヌス)が、ペストに見舞われた彼らの町にあらわれた。すべての秩序が崩壊したと思われた。また病院の中で略奪がおこなわれる混乱の中で、異教徒を助けるように教会共同体によびかけた。彼らは、異教徒かキリスト教徒かを問わず、先頭に立ってペスト患者の家に入り、不幸な人を世話し、死に瀕している人を励ました。計画的で活気にあふれた救援活動が続

けられ、異教徒が世話をしない死者の埋葬をおこなった。[13]

確かに、すべてのよき業は初期カトリック教会の中で称賛された。

聖霊は聖書の中で次のように語っている。「施し物と信仰によって罪は贖(あがな)われる。」(ソロモンの箴言 16:6）このことは(洗礼をうける）前からおかしてきた罪のことを言っている。それはキリストの血と聖化によって贖(あがな)われる。

同じように、聖霊は再び言っている。(シラの書 3:33)「水が火を消すように、施し物は罪を消す。」また、「治癒力のある水に入浴することによって、地獄の火が消されるように、施し物と信心深い業によって罪の炎は消え去っていく。」[13]*

当時のすべての監督はそのように語り、カルタゴのツィプリアン（キプリアヌス）もそのように語った。人は施し物を祭壇に献げ、それを配ってくれるディアコーンの両手に満たした。「また、最後の審きの時に、主が義なる人たちをみもとに呼び集めるその第１の点は、慈悲が占めていた・・・」。[13**] だが、古代の異教世界が、いかなる慈善の訓練もなしえていなかった時に、とりわけペストの時に見られるような隣人愛の熱中が起こった。施しは善い業である。それは、たびたび神の言葉が要求し、純粋な心を純粋な捧げものとする。そこで、報酬が約束されているから行うという考えは神の言葉の力のもとで消えてなくなる。初期カトリック教会は、叫び求める世界の厳しい困窮の中で、輝かしい愛のしるしを築き、数え切れないほどの道を異教のすべての人に示した。

3

4世紀の帝国教会

4 世紀のはじめ、皇帝コンスタンティンが共同統治者の勝者として帝位をうけ、キリスト教徒になった時、もろいローマ世界帝国に代わる新しい時代が始まり、同じく、今まで国家が決して公認せずに、たびたび激しく戦った教会にも新しい時代が始まった。貧困の状態が続

き、税の圧迫と、公務員の官僚主義の中で、個人の無法状態は増大した。教会は国家の中の国家をしっかり組織し、立派に導き、迫害の中で鉄のように鍛えられよく訓練された中核によって、輝かしい指導を受け、表現され、拡大され、よく鍛えられたディアコニーの奉仕を形成し、動揺する帝国を再びしっかりした土台の上に立たせるために、今や新しいキリスト教国家によって任務を与えられた。

どのような公共機関が無数の貧民、病人、奴隷、解放奴隷、囚人、売春婦の予測できない群れに福祉の援助をなしえただろうか。その公共機関は、輝かしいディアコニーの機関をもつ帝国教会に福祉援助を押しつけるようになった。教会は、これからは国家と経済の犠牲者の世話をしなければならなかった。

帝国教会はこの呼びかけから逃れることはなかった。教会は、増え続ける満潮のごとき困窮を考えると、どんなに援助の手を差しのべても、国の破滅は避けられないことを知った。いたるところで貧困化が起こっているにもかかわらず、国はますます容赦なく増税を行い、それによって困窮がなお増加していく諸悪の根源をもっていたのに対して、教会は、社会福祉政策の悪循環を克服するために、根本的な批判をし、また新しい方法を教えた。だが奴隷制の問題について、法的な方法で、その悪弊を撤廃しようと考えたことは一度もなかった。教会は奴隷のために、一生懸命に世話をした。教会は奴隷を教会共同体の中で平等な一員とみなし、身代金を支払って自由にするように努めた。奴隷制をなくす決定的な改善は、ストア哲学者たちが自分に要求し得たことである。[14]　だが、２，３世紀の経済変動は奴隷問題を後退させた。奴隷を所有することは、厳しく後退させられ、ほとんど実体のないものとなってしまった。そのかわりに未解放農民が新しい困窮として登場し、教会は新しい、解消しがたい課題に直面した。

だが、教会は、税金滞納者が税金取立の形でなす容赦ない追跡から神の家に逃れてくるすべての人を保護する権利を、国から強引に手に入れた。教会が弁護権を持つことを、国はついに嫌々ながら公認した。[15]

世界帝国ローマの途方もない貧困の時代に、帝国教会は病院[Hospit

舁er]を創設した。「もしこの時代に、教会が病院を創設するというただ一つのことだけをしていたとしても、それによって偉大なことを、またあらゆる時代から感謝されるにふさわしいことをなしとげた」。ウールホルンがいうこの判断はまったく正しい。病院制度の起源は東方にあり、そこで十分に発展した。最も大きく最も有名な病院施設はカパドキアの地方カエサレアのギリシア教会監督大バシリウスが建てた。１人の監督の指導によって、町の門の前に、大きな病院が建てられた。その病院は、やがて外国人、貧民、ハンセン病患者のための小さな家が集められてみごとなコロニーを形成した。[16]　それに孤児院、捨て子院、産院、老人ホームが加えられた。病院は東方から西方に移植された。ローマのファビオラ、ポルトガルのパンマックスは、西洋ではじめての施設となった。このキリスト教の施設と共に、ヨーロッパは最も大きな福祉をおこなうようになった。東ローマ帝国が、５世紀に、没落しつつある西ローマ帝国から最終的に分離した時、その病院を模範として、さらに拡大し、その医療と看護の組織を専門医と専門の看護人によって改善し、また病院思想をアラビア世界にも仲介し、その思想を熱心にとりいれて輝かしい拡大をなした。[17]

ローマの国は東方と同じように、西方においてこの病院制度を保護した。必要な資金は、一部は古い寺院の財産を教会の収入と共に国が提供し、一部はその他さらに祭壇にささげたものを共同体が提供した。贈与は教会を大土地所有者にし、監督は偉大な支配者となり最大の財産家となった。

だが教会の財産は貧しい人に属しており、教会の真の宝物は貧しい人たちであるということは、みんなの意識の深いところにまで刻みつけられた。[18]　即ち、教会財産が正しく使われるために、修道院に厳しくコントロールを要求する必要はおそらく一度もなかったであろう。

ディアコニーの新しい活力は、修道院制度と共に帝国教会の領域の中に入ってきた。修道院自身は、初めに不確かな歩みをしたあと、非常に早く、熱意をもって福祉と病人看護の奉仕に応じた。エジプトが最もつらい困窮の時に、最初は数百人であったのが、最終的には数千人にもなった保護を求める人のために「白い修道院」を開いて、着せ、

食べ物を与え、保護したアトリペのシェヌーテのような修道院は忘れられないで残っている。[19]

4

5世紀、民族移動の嵐の中の教会

誇り高いローマ帝国は、5世紀にゆるやかに死んでいった。押し寄せるゲルマン民族のもとで解体していった過程は、完全に異なる状況の下で、また、違った時期に西側の帝国属州のなかで起こった。それは6世紀と7世紀に初めて確実な終結を迎えた。帝国教会は解体した。統一されよく組織されたディアコニーは、もう維持することはできなかった。監督と修道士たちのもとにディアコニーの偉大な人たちがいて、まだ助けられるものを助けた。[20]

北アフリカではアウグスティン(430頃)が、人口減少の町、取り壊された城、焼かれた教会、破壊された修道院、今は野獣が住んで人がいない、昔は栄えていた地域に心をとめた。ヴァンダル族はアフリカの破局を動かしがたいものにした。そしてなお偉大な教父アウグスティンは休むことなく救助を呼びかけ、忠告し、励まし、助け、そこで出来る限りの救援を組織した。[21]

ドナウ川流域、またアルプス地方に慰めにみちた様子はなく、野放しのゲルマン兵士の群れにあふれ、略奪が行われた。ここでも同じように、一挙に日々の営みは止まり、すべては停滞した。禁欲主義者にして悔い改めの説教者セヴェリンは裂け目に踏み入った。いままで安全な生活をしてきたが、おびえているローマ帝国民の不屈の援助者また実際の顧問として、彼はゲルマン人の征服者からさえ尊敬を受けた。彼は預言者的才能によって、脅かされた地から逃げるように住民に勧め、それによって彼らは囚われと死を免れることができると言った。彼は突発した飢饉(ききん)の時に、弟子たちにとりかこまれて、食料品と油を配った。このように

してキリスト教ディアコニーにおける卓越した1人の人物が、その業

績とともに、ゲルマン民族の中世初期の中にそびえ立っており、それまでは無条件の愛をまったく知らなかった若きゲルマン民族に、キリスト教の愛をあらわした。[22]

ガリア地方、今のフランスにおいて、最も早い時期に、ある種の秩序が生じ、後にはローマの残りの人々はゲルマンの征服者と融合することができた。そこでは、トゥールのマルティンとアルルのツェツァリウス(カエサリウス)監督の姿がきわ立って輝いている。ツェツァリウスは、苦労の多い戦いの中で貧しい人の財産である教会財産を保護し、またディアコニーの奉仕なしではやっていけない破壊された修道院を再建し、アルルに病院を設立し、そこで出来る限り困窮をくいとめた。[23]

イタリアにおいては、崩壊していく政治と経済の混乱を静める猛獣使いとして、古代教会出身で、ペトロの座についた最後の偉大なローマ人、大グレゴリウスという重要人物があらわれた。帝国の没落は彼の目に明らかとなっていたが、彼は貧困と貧窮との戦いによって救えるものを救った。彼は、莫大な金額によって、途方もない金額を支払って蛮人の撤退を贖(あがな)い、身代金を支払って戦争捕虜を解放し、帝国のすべての地域からの難民に着せ、泊らせ、寡婦と孤児に食べさせた。病院は、修道士と修道尼だけが指導できるように指示した。それによって、ヨーロッパの修道院と病院の結びつきは、数世紀にわたって基準となった。[24]

古代教会における慈善事業を概観すると、近代にいたるまで、そのまとまりと規模の大きさには及ぶもののないディアコニー事業が、ここでどのように組織されたかが示されている。たとい、慈善というものが、キリスト教を通して初めて国際世界にもたらされたものでなかったとしても、ここに生まれたものは唯一無比のものであり、ほかのどんな世界宗教によっても、達成されていないものだった。

人は社会福祉政策の意欲をむなしく追い求めたが、キリストの愛の戒めは、帝国教会の中で見られた慈善活動を世俗化しながら、慈善の着想の豊かさの中で生きのびてきた。報酬思想は、キリストの愛から生じる真の愛の根を死滅させることはなかった。キリストのために多

くの苦しみを静め、そして多額な献金が提供された。教会財が貧しい人のものであり、教会の最大の宝は最も貧しい人たちであるということは、生きた勧告として中世に存続した。[25]

B．中世のキリスト教ディアコニー

1

ゲルマンの領邦教会の領土でのディアコニー活動

帝国教会は解体した。ゲルマンの個々の国の中に領邦教会が生まれた。都市文化は100年の間に衰亡し、それと共に古代教会のバックボーンであった監督制ディアコニーも衰亡した。ゲルマン人の生活が、地方にあらわれた。ガリア地方には自立した教区に昇格された多数の領邦教会が比較的早くからあった。これらのことがあらゆるところで起こった。それぞれの教区は自分の貧民の面倒をみなければならなかった。だが発端の域をこえることはなかった。

民族大移動のあいだ、従来の社会秩序はローマの奴隷民によっていただけではない、そうではなくゲルマン人の自己崩壊にもよっていた。この混乱した時代に物乞いの町になったところは数え切れないほどになった。飢餓（きが）と流行病は大勢の人の不安をふくらませた。中世初期の粗悪な交通手段と通商手段のために、また、商人階級が成立していなかったために、飢饉（ききん）の時に、あまり打撃をうけていない地方から補給をうけても、助けることができなかった。不安に包まれた住民は、地方のすべての家屋敷を捨てて、貧窮の町にやってきた。それは、飢餓のように新しい波が地方を襲う大疫病の影響以外の何ものでもなかった。[26]

教会はこの放浪者の困窮を適切に扱ってはいなかった。ゲルマン人の国は、高度に組織されたローマの世界帝国とは反対に、内部に大貧窮を効果的に処理できる行政機構をもっていなかった。

カール大帝は多くのことをしようとした。彼の優れた人柄のすべて

がそのことを保証している。伝記記者アインハルトは次のように述べている。

「貧民への世話と、施し物による援助を通して、カールは多くの敬虔な熱意を示した、また、(当時のドイツ、フランス、イタリア)の地方と国だけでなく、海をこえてシリア、エジプト、アフリカ方面、エルサレム、アレキサンドリア、そしてカルタゴ方面へもお金を贈るのが常であった。キリスト教徒が惨めにしていると聞くと、彼は困窮を助けた。とりわけ彼は、海のむこうの王との友情のために、生けるキリストの支配のもとに安心と救いに満たされるように努力した。」[27]

802年5月、アーヘンでおこなった彼の就任演説から、私たちは彼のキリスト教的、社会福祉法制定の基本的考えを知ることができる。

「自分を愛するように隣人を愛せよ。貧しい人に施し物を力の限り与えよ。外国人をあなたがたの家でもてなし、病人を訪ねなさい。地下牢にいる人に思いやりを示し・・・囚人を買いうけ、不当に抑圧されている人を助け、寡婦と孤児を守りなさい・・・。」[28]

教会が100年の間ずっと困窮者の世話をし、カール大帝が、あなたがたはみんな大家族の一員といって、大家族の面倒をみてきたように、領主がこの人たちの世話をする保護義務を拡大するように要求した。このことは、まったく古代ゲルマン法が言おうとしていることであった。

事実次のことが強調されて指摘されている。即ち、村の共同体と荘園領主の似たような道徳的義務によって、原始キリスト教会の共同体貧民救護が衰退するならば、きたるべき封建制度の時代は、社会福祉的な時代となっていただろう。[29]

カール大帝が、話に耳を貸さないことはなかった。中世の領主たちは大帝の模範に従い、自分を寡婦、孤児、そして旅人の保護者また避難所として呼びかけ、少なくとも彼らはたびたび熱心に、決然として、その後について行った。なお宗教改革時代に農民暴動を起こした農民たちは、皇帝を法の仲裁裁判官として、また抑圧された者の保護者として頼りにした。ディアコニーの職務はカール大帝によって、少なくとも当局に印象深いものになっていた。中世後期は国当局が行なう

ディアコニーも発展した。

2

中世盛期の修道院ディアコニーと信徒のディアコニー

中世盛期の終わりに一つの風変わりな情景が見られた。監督ディアコニーと共同体ディアコニーは困難な時代の中にあり、とりわけ暗黒の10世紀に、東からフン族、北と西からノルマン人、そして南ヨーロッパからアラビアの海賊が略奪行為を働き、衰えてしまい、ついに完全にまひした。

多くの小さな修道院と神学校は、その粗末な病院を引き受けなかった。ヌルシアのベネディクト（543年頃？）はその修道院規則の中にベネディクト修道会を次のように教えている。

「善き業の道具はどのようなものであるか。貧しい人を元気づけ、裸の人に着せ、病気の人を訪ね、死者を葬り、追われている人を助け、悲しむ人を慰める・・・客人のもてなしについて、すべての到着した客人にはキリストがもてなしたようにしなければならない。彼は次のように言っている。私は異国人であった。あなたがたは私をもてなした。聖書を読んで聞かせると客は感化を受け、その結果、人は彼に親しみを示すようになる。修道院長は客に手を洗う水を差し出す。修道院長も修道院共同体の全員も、すべての客の足を洗う。洗ったあとで、彼らは次の言葉を唱える。私たちはあなたの憐れみを受けた。おお神よ、あなたの住まいの中に受け入れられている。人は、貧しい人を、また巡礼者を受け入れるのに、特別で誠実な配慮をささげる。その時、その人の人格の中にキリストは受け入れられた。客の宿の世話は兄弟にまかされていて、その敬神の心を満たしている。そのためのベッドは十分な数があった。」[30]

どの新しい修道院改革も愛の奉仕を競って、対抗心を燃え立たせた。ロートリンゲンからはじまったクリニューの修道院改革は、11 世紀における信徒の世界を呼び覚ました。修道士と信徒の祈りの交わりにひかれた多くの人が、修道院に加入しようとした。信徒兄弟会がつくられた。このディアコニー奉仕のかなりの部分が彼らの手に移った。ついに自立した病院信徒会が生まれ、病院は新しい修道院共同体の中心となった。

霊的な信徒会と同業組合、その自主的な提携は、それ自身新しいものではなかった。この信徒会は、信徒が看病し、埋葬し、とりなしの祈りをする共同体として古代教会の歴史の中にすでに見られた。古典古代には、お互いに会員となって加入する会の大きなよろこびがあった。だがそれらは、ディアコニーの信徒会として中世に発展し、12 世紀には頂点に達し、13 世紀の前半にその存在が認められた。十字軍の時代は、病院修道院が生まれた。中世の女性の過剰はベギン会の運動をなだれのように増加させた。女性と娘たちは、修道院の拘束的な誓約がない、小さな生活共同体のなかに集まった。あらゆる都市にベギンの施設が生まれ、その入所者たちは施設の中で並んで敬虔な心の観察を受け、看病も受け、埋葬にも参加した。だが、ことによると根拠なしに、異端ではないかと疑われるような、自由な結社がつくられるようになった。彼女たちの多くは、異端審問所の前につくった避難所で物乞いの女性のそばにいた。彼女たちはキリスト教ディアコニーの真の意味を達成してはいない。[31]

だが、修道院の中にドイツ神秘主義が花開き、新しい愛の信念から生まれる奇跡的な愛も同時に花咲いた。偉大な神秘主義者はいつもマリアとマルタの奉仕の話を考察し、マルタの奉仕を賞賛した。[32]
心情の改善と思いやりの心の改善は、愛の活動にかなりの刺激を与えた。

このように霊的な信徒会は救貧院を充実させ、また中世初期におけるキリスト教慈善活動の乏しい初まりを凌(しの)いだ。この運動は13 世紀にその頂点に達した。その更なる発展はなかった。

3

中世末期の都市のディアコニー

中世の最後の世紀は、都市文化によって刻印される。貨幣経済は純粋な物々交換経済と交替した。都市は豊かに成長したが、それと同時に肝をつぶすような大貧窮も急速に増大した。売春婦の存在と物乞いは警報となった。

だがすぐに敬虔で裕福な都市市民階級の慈善施設の広大な分野が発展した。寄付するはかり知れない喜びが広まった。例えば、帝国都市ノルトリンゲンはすでに1373年に400人以上の貧民を、長期的な看護に受け入れた。「最も貧しい人への贈り物は宗教改革直前の時代に生まれた。」[33]　とりわけ既成の調理済み食料に使われた。寄付金は、公的な管理を可能にし、ねたみをうけるような不利益を避けるために、公平な分配をする必要があった。事前の準備をすることで、暴利がうまれず、変動する市場価格に左右されず、粗悪な製品を避けることが大事だった。お金を寄付すると、施し物を浪費する機会が多くなり、その誘惑は避けられないが、それは同時に止められた。その時貧民をそっくりそのままとどめて、わずかな収入を調べ、食料を買い入れ、調理をした。たいていはパンが配られた。[34]

市民の思慮分別がここでも感じられた。彼らはついにドイツ帝国の全都市の最高監督の決定により完全な寄付を勝ち取った。教会のディアコニーは、純粋に市民の - 都市の - 政府のディアコニーになっていかなければならない。政府の福祉政策は中世末期には一定の影響力を持っていた。それらは教会を通って、市役所では弾力性のあるものに

なった。だが、困窮に対する慈善活動の「合理化」は、手におえないものになってしまう。地方で物乞いをする外国人は困った事になった。アウクスブルクは、例えば、毎年冬が始まる前に、警鐘をならす鐘の音で、物乞いするすべての外国人を町の外壁の外に追放し、そうして困窮に負けないというだけでなく、キリスト教の愛を要求する絶対無条件性も同じように負けてはいなかった。救貧院[Spital]は町の貧しい人たちだけの避難所となった。

施設の多くの面で、都市の - 教会のディアコニーは全盛期を体験した。捨て子院と孤児院が建てられ、出産施設が様々な所にできた。巡礼者の家、ペストとハンセン病患者のために、また梅毒患者のために、病院が開設された。町の壁の内側に生じる困窮に対して、助けようとする親切な手があった。ここで、愛の力は緩(ゆる)んだりはしなかった。リューベックでは約70、ケルンでは約80、ハンブルクでは100以上の信徒会があった。貧窮の信徒会は、社交的・職業的な連合と会員の輪をこえて、キリスト教的愛の奉仕をつないだ。貧窮の信徒会は貧民のために自由に使える多額の財産を基金として、設立された。[35]

4

中世末期のディアコニーの情景

このように中世のディアコニーの風変わりな情景は、古代キリスト教から著しく際立って見える。監督ディアコニーと共同体ディアコニーは、修道院と神学校が中世初期に失った指導力をすでになくしていた。キリスト教の信徒会の運動は、中世盛期の間ほぼ2世紀にわたって教会のディアコニーを支えてきた。このように、それらは騎士修道会と、托鉢修道会にも、強い影響を与えた。中世の終わりに「都市のまたは市民の」キリスト教の献げ物と愛の力のなかで、それは再燃した。市当局が、その強い統制力によって寄付を獲得したとしても、信徒たちの献金と愛の寄付が直接的であることは変わらなかった。ただし、田舎では、ほとんど何も起こらなかった。

頂点に教皇の位を持つ世界教会、また国際世界の女指導者と女牧師は、閉鎖的な教会ディアコニーをあきらめ、複雑にからみあった特権をもつゲルマン人封建社会の人的結合主義に降伏した。それは、純粋に人としての個人的な特典や法的関係を砕いてときほぐした。個々のグループの自助と、グループの思惟を可能とする、ゲルマン人の協同社会の思惟の勝利は、中世の都市共同体に原始キリスト教会の共同体の思惟の回復を阻(はば)んだ。

カール大帝以降、彼のように - 実際に貧しい人と権利を奪われた人の保護者となり、よく定着した社会秩序またはその混乱の中の大困窮に介入し、有効に戦い、被害を防止した - 皇帝はいない。

大困窮の徹底的な撲滅は、貧しい人を宗教的に過大評価することによって妨げられた。貧しい人は貧しいキリストまたは苦しむキリストの代理とみられ、貧しい人々の困窮は宗教的に変容し、正当化された。古代教会の説教は、人は施しによって天の報いを得られると説き、これは中世の間ずっと素朴に続けられた。中世神学において強化された、完全な行為を信じる信仰は、この行為を奨励した。だが、ここで一般化してはならない。嵐の古代教会の中に、真の直接の、愛の心が終わらなかったように、助けに満ちた多くの愛が中世にもあり、神の言葉を食し、キリストに従って証する - 贈られた恵みの輝きのなかで明らかになった - 憐れみが流れていた。[36]

C．ドイツ宗教改革のディアコニー

1

ルター派

宗教改革とともに、キリスト教ディアコニーは新約聖書の基礎から根本的な変化と新築を起こし、ルターは単純な行為義認を破壊した。キリストを信じる心は次の事を知っている。即ち、一つの業だけがあ

る。それは神に命じられたもので、それゆえに、よいものである。キリストを固く信じる信仰のみがある。愛は信仰から生じる。「見よ、信仰から神に対する愛と喜びがあふれ出、愛から、隣人に無償の奉仕をなす、自由で自発的な喜びに満ちた生があふれ出る。」[37]

ルターは、いつも新しい比喩によって信仰と愛の切り離せない関係が重要であることを示した。よい木はよい実を結ぶ。「私たちの神はキリストによって私たちを助けてくださる。そのように私たちはがからだと働きによって、隣人を助ける他の事をなすべきでない。」[38] この献身は信仰から自発的に湧き出るものであって、彼は、「教師のよき業」を必要とはしない。

宗教改革はそう考えない。カトリック世界における行為を正当化す隣人愛は低いものとみなされ、正しいとは思われなかった。兄弟の困窮に基本的に献身することが、そこには欠けていた。しかし、宗教改革がすべての不安から完全に救う、隣人奉仕と報酬思想との関連を解いたことは、力強い救いであった。信者は、まったく直接に隣人に仕え、助けをなすことを許されており、人とともに生きる関係の中で苦しめられてきた負い目は、帳消しにされた。ルターは、更に個々の人を信じ、希望し、仕える共同体の基本的な力について、それが何であるかを知っていた。とりわけ、すべての信者が、すべて聖職者であると教えるようになった。キリストは、どんな苦難の中でも、聖職を通してすべての信者に与えられているキリスト教徒の交わりを思い出させる。その時、援助し支える共同作業において、祈りつつなす共通の責任において、まず、全信徒祭司制が実現する。「他者に対して、心から父・母・兄弟であること」を宗教改革者たちは取り戻そうとしてやまなかった。[39]

そう、ルターは古代教会を模範にしたキリスト教ディアコニーを考えていた。キリスト教共同体は困窮者を気遣うべきである。ディアコニーは、もう一度それを与えなければならない。「持っているものを与え、病気に苦しむ者を養い、困窮に悩む人をみなければならない。」古代教会において、監督は霊的なものを分かち与えたように、「奉仕者であるディアコーンたちは貧しい人々が世話を受けたという記録簿をも

つべきである。」[40]

信仰と愛の関連を、また全信徒祭司制の信徒の交わりを根本から意識することは、宗教改革の大きな成果である。だが、ルターが高く称賛した、古代キリスト教を模範とした教会ディアコニーに向かう段階は、このディアコニーを実現していない。ルターはそのことについて「われらの主、神なるキリストがなさるまで」待つべきだと思った。[41]ことによると、ここで宗教改革者はおくびょうであって、相当の体験が彼らを本当に驚かせていたのである。都市のディアコニーはもはや当局の指導を排除することはなかった。都市共同体と教会共同体はお互いに属していた。ルターは中間的な解決をさがし、それを見つけた。

ヴィッテンベルク、ライスニヒ、アルテンブルク、ニュルンベルクのカステンオルトヌンク[共済基金制度]は有名になった。だが彼が過渡期の緊急避難的解決としてなそうとしたことは力を弱め、救貧制度を行う場合、都市当局の代表者は、都市の利益を思うキリスト教徒の全体が考えていることに近いものであった。

ルターが、ライスニヒのカステンオルトヌンクの中で、彼自身がすべての階級の主人、また農民階級の主人であろうとした時、この制度ははじめからかなり完全には実行されなかった。ルターは、ライスニヒで１年に３回、市民総会を開こうと望んだが経費の増大に対する責任が問題となり、このプラン自体は初めから市議会の主導によってなされ、ルターが初めに考えたものとは違ったものになった。[42]

福音主義のドイツ帝国諸都市に、新しい荷車と幌がつくられ、多くの貧民の世話は、以前とはちがった仕方で熱心に取り組まれたことについて誤認してはならない。厄介な状況に直面して、人々は新しい勇気を持った。というのは古い病院がいたるところにあり、新しい方法を考えなければならなかった。多くの適切で包括的な目標が立てられるようになった。だが礼拝堂で集められた献金と、返還された修道院財産からの収入は - それは世俗の立場から受取られたものではないが - ひどい困窮をやわらげ、絶望から守る事を可能にした教会ディアコニーと市民ディアコニーを育てるのに十分でなかった。それはそれとして、教会をまったく貧しくした30年戦争にいたるまで、国際貿易の

移動と政治的破局によって帝国諸都市は貧困化した。教会は福祉の課題から、また国や都市国家の事柄から完全に締め出された。公共の慈善は完全にこの当局の管理の内でなされるようになった。

キリスト教共同体は、都市また国の担当部局がこの課題を肩代わりすることになじんできた。宗教改革の時代に、教会ディアコニーが適切な効果を発揮していないことは、なお不安であった。この不安が足元に広がった。献金集めと催し物は16世紀と17世紀に自然発生的に繰り返し行われた。ローマ・カトリックの対抗宗教改革による犠牲者のために、大変な努力がなされた。レーゲンスブルクにあるコルプス・エバンゲリコルムそのものはローマの攻撃に対抗するプロテスタント陣営のいわゆる保護団体の怪物であるが -1806年、不名誉な解散をした - オーストリアの隠れプロテスタントのために集められた広範な献金を管理していた。[43]

17世紀にクアザクセンに向かう10万人をこえる主としてドイツ系のボヘミア人が、強制的な再カトリック化を免れて、エルツゲビルグ山脈から移住して、押し寄せてきた。30年戦争によって大打撃をうけた住民であふれる無数のオーストリアの信仰亡命者がシュヴァーベンとフランケンに向かって移住した。[44]　1732年、ザルツブルクの人が後に続いた。ここでも同様に、福音主義救援の大波が再びおしよせ、自発的に行われた教会の献金のなかにはっきり示された。ユグノーの人たちが来た。亡命者グループのすべては、どんなときにも互いに親しむ事のない、何かを分かち合おうともしない、古くから住みついている頑固なエゴイズムに悲鳴をあげたくなるようだった。だが、ここで人間的な、あまりにも人間的なこととあさましさと並んで、本当に援助をさしのべようとする多くの人たちが出てきた。人々は国を追われた信仰の友の背後に、再び裏切られ故郷を失ったイエスを見た。[45]

宗教改革後にヨーロッパで起こったヴァルド派殉教事件は、プロテスタント教徒の心を揺り動かした。スイスとドイツの多くの地域に、ヘッセン－カッセル、ヘッセン－ダルムシュタット、ブランデンブルク、ヴュルテンベルクに、ヴァルド派の共同体が生まれた。物乞い同然となった人たちは助けられた。イギリスやオランダだけでなくドイ

ツでも、全ヨーロッパで17世紀から20世紀にいたるまで、故郷に残っていたヴァルド派の人たちのために募金がなされた。[46]

2

改革された世界 - ツヴィングリ - ヴッツアー
カルヴィン - エムデンの難民共同体
オランダ教会ディアコニー

改革された地域の中で、フルドリヒ・ツヴィングリはチューリヒのために市が救貧制度の指導をすることを認めた。ヘルマン・ブッツアーは、ストラスブールで真の教会ディアコニーをいつも力強く支持し、教会ディアコニーの導入を願った。彼にとって、教会は慈善を教会の本質的な使命とする自立した信仰と生活の共同体であった。彼は、国の貧民救済を、やがては交替されるべき応急処置としてだけ評価していた。状況の悪さは、彼の目的実現をストラスブールで拒んだ。[47]だが彼の思想は宗教改革の場に強い影響を残している。

ヨハネス・カルヴィン(1509-1564)は、ジュネーブの教会を彼の考えによって改造したのではない。ジュネーブの市議会は、ディアコニーの資金を用いる時、広範な共同決定権を放棄しないで、教会の財産管理を自分の手にしっかり保持していた。ジュネーブの教会が、牧師、教師、長老と並んで職務をおこなわせたそのディアコーンは委員会の指示に拘束され、結局、ルター教会のドイツ帝国諸都市の中にみられたもの以上に進展することはなかった。また1553年からイギリス、オランダ、そしてフランスからエムデンに合流した改革派難民の下に生まれ、また教区監督ア・ラスコが「貧困外国人ディアコニー」を統合した自発的共同体が生まれたところは - それは別のものであった。ゆとりがあって運命を共にする人たちは負担を受け取った。彼らの代理人

は分担金を集め、また定期的にエムデンの市民から献金を集めた。[48] ここで、もう一つの自発的共同体と同じように、貧民援助を引き受けた教会ディアコニーが再び生まれた。

一国だけで、純粋に教会ディアコニーをした国がオランダにある。ここでア・ラスコの模範は、ロンドンにいる彼の援助共同体の人たちに、またエムデンにいる援助共同体の人たちに、強い影響を与えた。自由と信仰の戦いがはじまる前に、すでに、オランダの信仰告白の中に、牧師の職務と並んでディアコニーと長老の職務が与えられるべきであると記されていた。ドルトレヒトの教会会議は、1619 年、次の事を承認した。すなわち説教職、聖礼典の執行と公の主の祈願とならんで、キリスト教の施しの奉仕が与えられている。ドルトレヒトの教会会議の後、いくつかの地方では、すべての町や村に、この共同体の職務に属するディアコニー職を開設しようとした。しかし、人は、新しいエラスムス的寛容によるヒューマニスティクかつ実践的思想によって、教会と聖職者と貧民のすべての財産を当局から奪い取ってしまった - カトリックの階級制度の力が宗教改革と関係を断った以上の - 市当局の冷酷な抵抗にあった。

しかしオランダでは、教会自身が、この状況において、多くのプロテスタント教会の要求とうまく調和しなかったのではない、そうではなく、よかったり悪かったりする成果をみながら公共の共同体ディアコニー職を貫いていこうとした。病院、旅人の家、老人ホームは、信仰告白をしているかしていないかに関わりなく、助けを必要とする人に役立つ市当局の手の中にしっかり保持されていた。教会は、制度を持たないデイアコニーを制限すべきであって、また多くの制限をがまんさせるべきである。政治的、宗教的、社会的状況は、ディアコニーが教会の権力者の署名一つで、あっさりと任された以上に大変複雑であった。

当局の公共福祉事業とならんで、教会のディアコニー職がなされ、裕福なオランダでは、老人、寡婦、そして孤児の世話は、たびたび同じ寛大な方法でなされた。物乞いは職を世話されるようになり、例えば、同じ屋根の下に互いに独立した住まいが静かな中庭を囲み、収容

者が小さな個室で安全に暮らせる、「ホフィエス」[Hofjes]　老人ホームを多数つくり、提供を受けた。

どんなに多くの人が身分の壁に束縛され、また同時に古代教会の愛の共同体からはるかに遠ざけられていたか、ドルトレヒトで1619年に提示され1955年まで使われていたディアコーンの任職式の定式が、よく伝えている。即ち、「幸いであれ、あなたがたの国。十分に与え、よく伝えなさい。また、あなたがたは貧しい者、霊的に心貧しくあれ、またあなた方の扶養者に対して畏敬の念をもって接しなさい。彼らに対して感謝しなさい、不平を言ってはならない。魂の糧のためにイエスに従いなさい、生計のためであってはならない。盗んだ人はこれ以上盗んではならない。それだけでなく困窮している人たちになすあなたがたの手で何らかのよき働きをしなさい。」[49]

教訓的な口調で語られている実直な定式は、Ｉヨハネの手紙3章14節または、マタイによる福音書25章35-39節にのべられていることから、どれほど離れていったことか！このオランダの教会ディアコニーも、ヨーロッパ・プロテスタント教会における公共のディアコニー全体のように市民階級化した。献身者の人材が不足したことはなく、オランダのディアコーンたちは沢山いて、なお、その中でディアコニーはその存在をかすかに生きながらえさせて、それで死ぬことはなかった。ディアコニーが死の眠りについたのは1700年以後であった。しかし、まさに、この状態の中で、19世紀の教会は世界の困窮がその戸を叩いた時、ディアコニーは現役を終えたというよりも害になっていた。[50]　それは時代遅れで、古い時代の市民階級化した様式と共に、実際に邪魔であり、また避けられないものとなった！

プロテスタントの中で市民ディアコニーについて、それが宗教改革後に明らかになってきたように、次のような問題が明らかになった。即ち、「助けを求める叫びが世界中に起こっている。施設への処遇ではなく、兵営に入ることでもなく、ふさわしい憐れみを表すことを求めている。イエス、愛する主(しゅ)よ、私を憐(あわれ)んでください！」[51]　都市または国の貧民援助が、古代教会のディアコニーから遠くはなれしまったことについてルターが感じていた不安はもう一度あらわれるにちがいない。